

Asif Agha 著

Language and Social Relations

(ケンブリッジ大学出版局、2007年、22.8 × 15.2cm、446頁、£ 18.99 (ペーパーバック)

£ 50.00 (ハードカバー))

榎本剛士

2006年5月、立教・異文化コミュニケーション学会第3回大会において、現代言語人類学の第一人者の一人である、マイケル・シルヴァスティン氏による講演が行われたことは、記憶に新しい。そして、“How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning”と題された同氏の論文が、2007年3月発行の本誌第5号に掲載されたことは、われわれにとって、現代言語人類学の学問的アプローチに身近にふれる大きなきっかけとなったといえよう。

さて、ここに紹介する *Language and social relations* の著者、Asif Agha (アジフ・アガー) は、米国シカゴ大学でシルヴァスティンに師事し、1990年に博士号を取得、現在は、米国ペンシルヴェニア大学の人類学部で教鞭をとっている。本書において、著者は、ボアス、サピア、ウォーフから、ヤコブソンによるパース記号論との接合を経て、ハイムズ、ガンパーズ、そして、シルヴァスティンによる「社会記号論」的展開へと至った、現代言語人類学の伝統的姿勢を十全に引きついでいる。すなわち、社会文化史的な「場」において起こる(経験可能な)出来事を中心に据え、それが、言語構造、社会・文化的カテゴリーといった、「象徴」的なものといかにしてつながり、その結果、いかなる社会的効果が生じるのか、という問いが、本書を構成する全8章の通底音である。したがって本書は、じっさいにフィールドへ出かけていき、そこでどのようなコミュニケーションが行われているのかを軸として、ある社会における「象徴の世界」と「今・この世界」の全体像を把握しようとする言語人類学の構えを、数多くの具体例とともに、読者の目のあたりにさせてくれる1冊である。

Reflexivityと題される本書の第1章は、あとにつづく7章を費やして展開される議論を根底で支える、理論的枠組の導入部分である。そこではまず、(言語使用を含む)コミュニケーションによってもたらされる社会的効果は、きわめてコンテキスト(依存)性が高く(context-bound)、したがって、本質的に「指標的(indexical)」である、という記号論的事実が確認される。そして、言語のみならず、表情、姿勢、声のトーン、さらにはコミュニケーション参加者の社会的アイデンティティといった多種多様な記号は、じっさいのコミュニケーションの場においては、多数、同時に起こっており(co-occur)、それらが互いに互いを特徴づけ合い統制し合う「メタ記号(meta-sign)」として作用することによって、再帰的に「今・ここ」のコミュニケーションの意味が決まる、といった原理が示されると同時に、そのようなプロセスを記述するための概念が、余すところなく、提示される。

つづく第2章(From referring to registers)では、コミュニケーションにおける意味のなかで、言語構造に内在する意味が占める部分は、じつはごく一部であることが詳説される。言い換えるならば、言語構造に内在する意味は、じっさいのコミュニケーションの場で、「何かについて言及する」という社会的行為(の一部)としてしか現れることはできない、というのが、著者の主

張である。(当然、社会的行為は、コンテキストのなかで起こる。)つまり、じっさいのコミュニケーションにおいてなにかがさし示され、コミュニケーション参加者の間になんらかの共通理解が生まれる場合、それはすでに、多くの社会的な記号過程を経由した結果であって、その根拠を言語構造に内在する、コンテキストから切り離された(脱コンテキスト化された)意味に還元することは不可能である、ということが、第2章全体を通じて、詳細に解説される。

そして第3章(Register formation)では、第2章で提示された議論が、さらに展開されることになる。著者によると、「レジスター」とは、「さまざまな(「今・ここ」で起こる)行為レベルの記号と、個人の(社会的)イメージ、対人関係、行為の類型などを含んだ、生起可能な効果とを結合させるような、(語用)実践の文化的モデル」である¹。言語が、コミュニケーションの場で使用されるかぎりにおいて、われわれに経験可能なかたちで現れるということは、言語(使用)が、不可避免的に、他のさまざまな社会文化的要因(たとえば、権力、機関、階級、アイデンティティ)と一緒に起こる(起こらざるをえない)ことを意味する。そのことは、特定の言語使用(また、「音声」などの、言語における経験可能な部分)に、行為の解釈枠組としての社会文化的ステレオタイプを(言語使用の効果として)呼び起こす機能を宿らせる。そして、それが何度も反復されることで、一つの安定した社会的規則(social regularity)としての「レジスター」が形成されていく、こうした過程が、アガーの手によって鮮やかに炙り出される。

以上のように、「コミュニケーション出来事」を基点として、言語、社会、文化を研究するための一般的な枠組が、本書の始まりの3章を通じて詳細に記述されたのち、第4章から第8章においては、具体的なレジスター現象が緻密に分析されていく。第4章(The social life of cultural value)では、イギリスにおけるRP(Received Pronunciation)がいかんにして標準的な地位を獲得したのか(厳密には、ある特定の音声の「標準性」は、どのようなコミュニケーションを通して生み出され、維持され、変容するのか)という問題がとりあげられる。つづいて、第5章(Regrouping identity)では、「アイデンティティ」や「グループ化・再グループ化」へと議論の焦点が移され、上記「レジスター」の使用のみならず、「挨拶」の仕方といった、コミュニケーションの儀礼的側面が、コミュニケーション参加者のアイデンティティの生成に深く関与していることが示される。このようなプロセスを描き出すことで、著者は同時に、アイデンティティとは決して固定化されたものではなく、コミュニケーションの場において生み出されたり、維持されたり、無効にされたりするものであることを明らかにする。

第6章(Registers of person deixis)、7章(Honorific registers)、8章(Norm and trope in kinship behavior)においては、それぞれ、人称代名詞の使用におけるレジスター現象、敬語のレジスター、そして、親族名詞の語用(=じっさいの言語使用)が、やはり一貫した原理にもとづいて、分析・記述される。たとえば、*tu*や*vous*のような、一つの具体的現れ(=トークン)は、そのみで「敬意」などといった社会的特徴をさし示すことができるのではなく、コミュニケーションの場で、話者のイントネーションや表情のみならず、語が喚起するステレオタイプ、そこに居合わせるコミュニケーション参加者の役割、また、彼／彼女らがもつ解釈の枠組といった、さまざまな記号と共に共起し、コミュニケーション参加者間の社会的関係を「今・ここ」のコミュニケーションの場において顕現させることによって、はじめて社会文化的意味を帯びたものとなる、ということが、繰り返し説明されていくのである。

また、第8章における「親族名詞(kin terms)」の語用に関する説明は、日本語の例も多く用いられていることもあり、われわれの興味をそそる。たとえば、本書でも例として紹介されている、「おば」という親族名詞を考えた場合、「おば」という語に内在する意味は、「自分(自己)(=人

類学でいうところの“Ego”)の父／母の姉妹」といったものであろう。しかし、じっさいに「おば」という語が使用される場合、それぞれのコンテキストにおいて「おば」が帯びる意味は、じつに多様である。たとえば、甥・姪から贈り物をもらった女性が「おばさん、嬉しいわ」と言うとき、「おば」は明らかに「話し手 (addresser)」をさしている。同様に、顔なじみの店の店主の女性を、親しみをこめて「おばさん」と呼ぶときや、自分の配偶者の叔母・伯母に「おばさん」と呼びかけるとき、さらには、見ず知らずの女性が迷子の男の子に「おばさんが一緒にママを探してあげるからね」と言うとき、これらすべての語用における「おば」の意味は、上に示した「自分 (自己) (= “Ego”) の父／母の姉妹」に還元できるものではない。つまり、「おば」にまつわる社会的現実 (social reality) は、「親族体系」という抽象的な構造のなかにではなく (無論それも、重要な一部分ではある)、「おば」という語のじっさいの使用と共起する (「親族体系」の枠組を超えた) 社会的事象や規範、そして、その結果もたらされる社会的関係において考察されねばならない、と著者は読者を導くのである。

以上、根底に流れる「問い」のありようを中心に本書を紹介してきたが、ぜひ、本書を手にとり、本評では省略せざるをえなかった、さまざまな社会から収集された具体的データ、そして、それにもとづく具体的かつ緻密な議論を参照されたい。また、本書を読み進めると、読者は、いかなる社会文化的事象も、それがコミュニケーションを通して経験可能な形態をもたないのであれば、つまり、なんらかのかたちで“communicable”でなければ、それは、社会や文化を構成する効果をもちえない」というテーゼに何度となく出会う。このようなテーゼの反復によって、既存の社会文化的カテゴリーではなく、「コミュニケーション」という記号的出来事を出発点に据え、そこから「文化」や「社会」へ至るという道が、本書の放つ光の先に、照らし出されているのではないだろうか。

147

繰り返しになるが、*Language and social relations*において、著者のアジフ・アガーが執拗に読者に投げかけているものは、一方で「今・ここ」には存在しない「象徴」のレヴェル、他方では一回的な「出来事」のレヴェル、いずれにも問題を還元することなく、両者がコミュニケーションを通していかにつながり、そのことがいかなる社会的効果をもたらすのか、という問題を真摯に追究する学問姿勢であろう。すなわち本書は、たとえば、「〇〇文化」「〇〇人」といったカテゴリーを前提とする思考に対して、大きな反省を促す書であると同時に、そこから脱する方法をさし示す書でもあるのではないか。もしそうであるならば、「理論」と「実践」の統合をめざす、われわれ「異文化コミュニケーション」の学徒にとって、本書は間違いなく、大きな手がかりの一つを提示していると思われる。本書が、異文化コミュニケーション研究を志す多くの大学院生、および研究者の手元に置かれることを、せつに願う。

註

- 1 拙訳 (カッコ内加筆筆者)。原文は、“registers are cultural models of action that link diverse behavioral signs to enactable effects, including images of persona, interpersonal relationship, and type of conduct” (p. 145)。